



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。



題字 山本 廣

聖三木図書館友の会会報『ゆるし』第2号

発行日：2011年7月31日

発行者：荒谷 幸二郎 / 編集者：竹内 光 / デザイン：鈴木 博文



大震災、そしてゆるし  
イエズス会日本管区管区長  
梶山 義夫

悲惨な震災が発生して、三ヶ月余りがたった。日本の現代史の中で、これほどの人的・物的被害を被ったものは、先の大戦以外にはない。

地震で大地が揺れ、津波でありとあらゆるものが押し流されていった。そして福島第一原子力発電所からは、放射能が漏れているという。具体的な状況については、各種報道に譲ることにして、私自身の小さな経験をまず述べる。

私はあの日、聖三木図書館が入っている岐部ホール六階の会議室にいた。三時から教会使徒職関係の委員会が開かれることになっていた。山口、広島、神戸など各地から参加者が集まり、雑談をしながら全員が集まるのを待っていた。そこに、あの地震である。東京という震源地から離れた場所ではあったが、少なくとも私にとっては大いに揺れた初めての経験であった。

その時以来、自分が本当に小さな存在であること、人間がいかに進歩を遂げたといっても極めて非力な存在であること、そしてセキユリティがいかににもいものであることを思い知らされ、またさまざまな事柄に対する怒りや憤りを感じ続けている。その怒りや憤りの対象は政府の対応であったり、電力会社であったり、いくつかの政党であったりするが、さらにその対象はこの惨事を前にして大して何もしておらず、無力感のただ中に留まっている自分であり、また天地万物を創造し、統治しておられる方にも及んでいない。

さまざまな思いが交錯する中、私たちにとって今必要なことは、それぞれの責任に応じた痛悔、償い、ゆるし、そして新たな生き方ではなかるか。あの発電所を運営する電力会社、発電所の設置を許可した政府やその時の内閣を構成していた政党の痛悔と償いはもとより、さまざまな形で多くの人々の責任が問われ、痛悔と償いが求められる。同時にさまざまな段階におけるゆるし、つまりゆるし、ゆるされることを通じて、今回の大震災だけではなく、長年の歩みの中で壊されてきた絆の修復を目指し、新たな連帯を形成すること、さらに最も弱い立場にある人とは誰なのかと問いながら、まったく知らない人にも救いの手をさしのべること、これが新しい生き方であり、新たな創造への一歩ではないだろうか。あの日、聖三木図書館も揺れた。多くの書籍が本棚から崩落し、一日休館にして、復元に努めた。蔵書には、痛悔について、償いについて、ゆるしについて、示唆に富むものが多い。新たな生き方の礎としていただければ幸いである。



聖三木図書館と私  
上智大学長  
滝澤 正

私が上智大学の法学部に勤務するようになったのは昭和五十一年のことです。既に三十五年も前のことになりました。聖三木図書館は、当時は聖三木文庫と呼んでおり、上智会館の中にありました。私は上智会館の三階にあった教職員食堂に(時として)四、五階にあった会議室に、稀に二階にあった特別会議室に)行くことを日課としていました。二階の階段の踊り場から見える聖三木文庫は、いかにも静かなたずまいでした。が、残念ながら訪れたことはありませんでした。

三年前に聖三木図書館が上智大学からイエズス会に移管され、場所は大学と隣接してはいますが、キリスト教を直接の研究対象としているわけではない私には、一層訪れる機会が遠のいていました。このたび図書館長として私の先任者である宗先生から機関紙『ゆるし』への執筆依頼があり、先日初めて訪問いたしました。石神井分館、キリスト文庫と併せて、イエズス会と上智大学の存在を実感した次第です。

ところで、私自身は、現在法科大学院に所属しており、フランス法と比較法を専攻しております。このように外国法とりわけ西欧法を研究対象にしていますと、これを深く理解しようとするれば、教会法さらにはキリスト教といった文化的背景に関する知識が必要になってきます。しかしこれは私にとって大変重い課題であるため、当面はもう少し現象面である実定法を中心とする研究にとどめることを考え、今日に至っています。聖三木図書館を積極的に利用されている読者の皆さんに心から敬意を表するゆえんです。

やや専門的な話になりますが、西欧法の共通する基盤としては、ローマ法を指摘することができます。ローマ法は技術的に大変優れたものであって、我々が今日使用している法制度の大半の骨格をなしています。しかしその法技術に近代的な肉付けを与えたものとして、実は教会法の影響を忘れてはならないのです。たとえば今日我々は、「契約守るるべし (Pacta sunt servanda、合意は拘束する)」という原理を当然のように受容しています。ローマ法で必要とされた目的物自体やそれを象徴する物(建物の場合)は鍵)や契約書の引渡しなしでも、さらには契約書自体を作成しなくても、法は合意の有効性を認めます。こうした要式主義から諾成主義への変化には、取引に精神の誠実さを求めるキリスト教の考え方が反映しています。西欧法の法文化的背景をより深く研究できたと思いつつ、日暮れて道遠しというのが私のいつわらざる実感です。



キリストの教えを実行した  
二十六聖人  
日本二十六聖人記念館館長  
デルカ、レンゾ S.J.

手を開く二人  
長崎の西坂公園にある彫刻家、舟越保武作の日本二十六聖人記念碑には二十四人が手を合わせて天を仰いでいますが、二人は手を開いて下の方、見上げる人に目を向けていることに多くの巡礼者が関心を示します。

記念碑を見る人は二十六聖人のことを考えるように導かれます。それで、手を開いている二人と視線が会うときに「なぜ、二人だけが…」という疑問が起きます。つまり、二十六聖人のことを思うことから自分の疑問に出会います。本来彼らの苦しみ、功德などを考える方が自然でしょうが、この二聖人が私たちに向かって何かを語りかけているようです。言うまでもなく、船越先生の卓越した技術の現れですが、芸術作品を通して福音宣教ができることも示しています。

ここで殉教者たちのことを考えてみましょう。手を開いている一人であるパウロ三木は、十字架に付けられ、注目されていることを利用したかのように、最後の説教で「キリストの教えに従って太閤秀吉と私の処刑に関わった人を、赦します」と遺言を残しました。パウロ三木は、十字架さえ説教台にして最後まで宣教する姿勢を示したといえます。

手を開いているもう一人、スペイン人のペトロ・パウチスタ神父についてはそれほど知られていません。パウチスタ神父とその姿勢について考えたいと思います。

パウチスタ神父は、唐津（佐賀県）から自分が所属する共同体（フランシスコ会）の修道士宛に書いた手紙で「迎えに来ないで下さい。迎えに来れば、秘跡を受ける許可を出した寺沢氏（長崎奉行）が太閤秀吉から罰せられるからです」と書いています。つまり、極めて必要を感じたであろう、自分たちにたいする慰め



長崎・西坂にある26聖人記念碑。右から6人目が手を開いた聖パウロ三木。

を置いて、迫害者の寺沢氏のことを考えていたことを示しています。磔刑になる極限状況の中でさえ自分の親戚、友達だけではなく、自分を殺そうとしている人々のことも含んで考えていたのです。また、自分の国だけではなく、自分が理解しにくい国・ニッポンの人々をも含めて考えていたのです。記念碑上で手を開いている二人は「いくら苦しい状態に置かれても、他人を忘れてはならない」と叫んでいるようです。

イエスの言葉の実現  
「自己実現」、自分の夢を実現することが大事にされる現代社会に対して、彼ら二人は今も語り続けています。二人を含む二十六人が殉教した二五九七年（慶

長元年）には、フランシスコ会の修道士が日本に来てからまだ五年しか経っていませんでした。彼らの日本での宣教活動が軌道に乗ったかと思った時に、殉教によって半分以上の来日メンバーが殺されてしまうことは痛手だったはずですが、にもかかわらず、それを喜んで受け入れました。また京都から長崎への途中で自ら進んで殉教のグループに加わった二人もいました。福音書に『一粒の麦が死ななければ一粒のままに残るが、死ねば豊かな実を結ぶ』というイエスの言葉があります。殉教者たちは命を捧げるという意味でも、宣教師としての自己実現により死ぬという意味でも、このイエスの言葉を実現したと云えます。

別な観点からすれば、彼らが「他人のために自分の夢を脇に置く」心の広さを現しました。その一つの具体的な現れとして、安穩な前の状態に戻るより、与えられた状態において自分のできることを見つける姿勢だったと思います。つまり、彼らが迫害のない時代を懐かしく思っただけで、迫害が過ぎ去るだけ待ったとすれば恐らく多くの悩みを抱えたまま殉教したでしょう。しかし、二十六人は、殉教が与えられたことを「恵み」として受け入れ、その殉教にどう臨めばいいのかという大きな姿勢転換ができました。

与えられた状況に相応しい「奉仕」の仕方を生み出したといえます。「こだわり」に対して「切り替え、順応」を実行したのです。

人のためにできること  
処刑前には人間としての不安があったでしょうし、できるだけその不安を取り除いて欲しかったでしょう。しかし、「捕らわれた」、「長崎で磔にされる」と告知された瞬間から、彼らは失うことがないと感じました。使徒パウロの表現を借りれば「捕らわれた身の自由」を味わいました。彼らは日本で長く福音宣教する代わりに、京都から長崎への道を通してキリストを伝えようと思いました。言葉のできる人は説教などを通して、自分の受けた教えを伝えましたし、日本語ができなかったメキシコ人のフイリッポ修道士のような人は、寛容と赦しの姿勢を通してキリストの教えを顕現しました。

東日本大震災という大きな災難に直面する私たちも、二十六聖人の姿勢から学ぶことがあります。恐らく経済的にもっと豊かな世界に戻るといえる考えより、この与えられた状況は、自分を置いて他人のために何ができるかを考えるいい機会とすること、これこそが、両手を開いている殉教者のメッセージでしょう。

今年、来日した初めての教皇ヨハネ・パウロ二世が福者にになりました。教皇が長崎で二十六聖人を模範と仰いだように、私たちが彼らを模範に仰ぎましょう。福者ヨハネ・パウロ二世が殉教者のメッセージを知らせて宣教したことに感謝しながら、私たちが殉教者のメッセージを多くの人々に伝えていけるよう、また、それぞれの立場において、それが実現するように祈りたいと思います。

至福の空間、聖三木図書館

石川 陽子

私の所属、上野毛教会の中川博道神父様は、いつも講話の中で何冊かの本を取り上げて下さいます。私がお話する『サモス巡礼の精神』の写真的な早読み始めです。中にも、アディン・シュタインザルツ著「聖書の人間像」は今も聖書としてP・リーチ著「神の心」が、その下の表紙にはヴェイユ直筆の「愛」という詩が書かれています。1938年11月に、これまで決まっていた「愛」(Love)の詩が、突然気がついたことだ、とあり、私もこの詩を単に愛読しているのではなく、覚悟を込めて愛読しています。この愛すべき空間から出たい、祈りながら。



### 聖三木図書館のロゴ 「苦難とそれよりの救出」 聖三木図書館館長 宗正孝

ここに載っている聖三木図書館のロゴは、パンフレット作成のときに、鈴木博文氏が考案・制作されたものです。彼はこの会報『ゆるし』のデザインも無償で担当してくださっています。真中にある卵形の円は聖パウロ・三木の顔をイメージして描いたもので、よく見ると片耳だけになっていいます。それは左耳を削がれた苦しみを象徴しています。左右に伸びる翼のようなものは、説教のしぐさとして彫像されている聖パウロ・三木の両腕を表わしていますが、同時に祈りのポーズでもあります。中央下に描かれている十字架は苦難とそこから救出される希望のしるしともいえるでしょう。愛する者のために犠牲を、苦しみを堪えることは、もはや苦しみではなく、歓びとなります。名もない小さな路傍の石が光り輝く宝石と変わるのもその時です。聖パウロ・三木も処刑される時、「主（イエス）」と同じ三十三歳で、同じ

### 近頃、聖三木図書館でよく読まれている本 2011年7月

幸いの書	晴佐久 昌英 著	女子パウロ会
いのちの森の台所	佐藤 初女 著	集英社
老いの才覚	曾野 綾子 著	KKベストセラーズ
イエス・キリストの『幸福（さいわい）』	光延 一郎 著	サンパウロ
「待つ」ということ	鷺田 清一 著	角川学芸出版
聖書を味わう	高橋 重幸 著	オリエンツ宗教研究所
はじめての宗教論 左巻	佐藤 優 著	NHK出版
くじけないで	柴田 トヨ 著	飛鳥新社
精神科医の見た		
聖書の人間像	平山 正実 著	教文館
修道院の断食	B・ミュラー 著	創元社
大聖堂	ケン・フォレット 著	ソフトバンククリエイティング
イエス・キリストの復活	大貫 隆編 著	日本キリスト教団出版局
ふかいことをおもしろく	井上 ひさし 著	PHP研究所
イエス・キリストの履歴	岩島 忠彦 著	オリエンツ宗教研究所
主の憐れみを叫び求めて	ヘンリ・ナウエン 著	あめんどう
ふしぎなキリスト教	橋爪 大三郎共 著	講談社
聖書を読んだサムライたち	守部 喜雅 著	いのちのことば社



金曜日には十字架につけられた。……私は価値のない人間だが、主イエスのみ跡をたどれることを非常な喜びとします」と獄中で述べています。聖パウロ・三木が最後の十字架の上ですべての人に赦しの祈りを述べたことは創刊号でも書きましたが、「ゆるす」ということは苦痛に満ちた過去をいやし、自分自身の解放と自由につながっているものです。迫害の当時、イエズス会とフランシスコ会とは布教の方法などをめぐって、対立抗争をしましたが、殉教という大義の前に両者はお互いの非を認め合い、赦しあつたと伝えられています。使徒聖パウロも「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい」（エフエゾ4：32）と言っています。

今日日本は甚大な災難に見舞われ、多くの人々が困難な生活を強いられています。当図書館も三月十一日には猛烈な揺れに襲われ、五、六列の書架の上部から大量の書物が落下して、床にうずたかく積み上げられました。それでも余震が少しおさまったところ、当日館内におられた何人かの方がスタッフと一緒に自分のことのように本の整理を手伝ってくださり、翌日も管区長ご自身がジャーシ姿で、整理を手伝ってくださいました。創刊号の「利用者からの声」にも「ここは自分の図書館みたい」と述べられています。聖パウロ・三木自身も、言い伝えによれば、一五九六年（慶長元年）のマグニチュード七・五以上の直下型の大地震が京大阪を襲った際、京都にいました。震災後、おびただしい怪我人の治療や炊き出しに協力し、積極的に被災者の救援活動を手伝ったといわれています。

東北・岩手の詩人宮沢賢治も「雨ニモマケズ」の中で、西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ南ニ死ニサウナ人アレバ／行ッテコハガラナクテモイイトイヒと詠んでいます。多くのボランティアの人や義捐金や救援物資が日本全国、世界各国から次々と送られていますが、こういう状況にもかかわらず、聖三木図書館にも今年も各イエズス会共同体と個人から多くの寄付が寄せられました。心より感謝したいと思います。

私たちも身をもっては出来なくとも、小さな犠牲をささげ、被災者の皆さんの苦しみに寄り添いながら祈ることはできます。聖三木図書館の友の会もそうした連帯と協力の精神で今後も活動できればよいと思います。「どんなに切なくて必ず明日は来る。ながいながい坂道のぼるのはあなた独りじゃない」のですから・・・

### カウンターの中心から

皆さんは閲覧室の壁を飾る一連の白黒写真をご覧になつていますか？全てスペイン人写真家ルイス・オカニヤ氏（一九五九〜二〇一〇）の作品です。上智大学イスパニア研究センター主催の写真展で展示されたものの中から十四点をマルティン神父様が聖三木図書館のために譲り受け、自ら壁に掛けて下さいました。スペイン・ガリシア地方、サンティアゴ巡礼路沿いにある修道院や修道院の図書館など、長い歴史を経て来た静謐な空間が映し出されています。当館ではオカニヤ氏写真集「サモス―巡礼の精神―」「トウキョウココロ」をはじめ、写真提供の「聖地サンティアゴ巡礼の旅」「ガリシア、大西洋をみつめるその深い精神性」などを所蔵しています。

サモス修道院には千年以上前から追い求め続けている道がある。神を追い求めることは今に始まった訳ではない。サモスで生きる修道士たちはいつの時代も神を追い求めて来た。：今回私は彼らの生き方を写真を通して表現しようと試みた。：それぞれの写真はゆつくりと撮られていて、ゆつくりと写真撮るとは写真のもつ性質とは矛盾するが、ゆつくりとは時間をかけ、時をええ何度も同じものを撮り、一瞬の瞬間ではない揺るぎない日々の時間を求めて撮り続けたということである。

（ルイス・オカニヤ「サモス―巡礼の精神―」より抜粋）オカニヤ氏は日本の文化にも深い関心を寄せておられ、特に高野山、熊野古道など日本の「祈りの道」を撮影した写真展が二〇〇八〜二〇一〇年に日本各地で開催されました。二〇一〇年八月、享年五十一歳で惜しまれつつ帰天されました。



閲覧室の壁に架けられた写真



【特別寄稿】  
『隠された顔』

木崎 さと子

年齢のせい最近とみに早起きになり、イグナチオ教会の朝一番のミサに与ることがほとんどになった。六時過ぎに家を出て早朝のしずかな道を歩き、地下鉄に乗っても空いていて、その時間帯のミサには修道女の方の姿も多く、いいことばかりなのだが、ちよつと残念なのはオルガン伴奏がないこと、そしてミサの後に寄ろうにも、聖三木図書館がまだ開いていないことくらい。

そんなこともあつて最近御無沙汰しているが、上智会館に聖三木図書館があつたところには、ずいぶんお世話になった。薄暗い書庫に入り込んで、ほぼすべての本に淡緑色の紙カバーがかかっていることに感心したものだ。

イダ・フリーデリーケ・ゲレスの『隠された顔』もここで見つけた。これはリジュエの聖テレジアの伝記というか研究書ともいふべき分厚い本だが、テレジアの魂の成長を当時のカトリック教育や女子修道院の在り方のなかで緻密に辿る労作である。ちなみに著者のゲレスはカトリック作家として知られた人だが、例のクレーンホーフ光子の娘である。

ドイツ語からの翻訳は、当時の日本のカトリック教会の習慣に従つてかなり無理な敬語を多用しているせいもある。読み易くはない。それが熟読を強いて却つてよかつたが、必然的に長期間借り出しになる。他に借出し希望者が無いのを幸い、延長手続きを怠けていた。

そのころ芥川賞を頂き、柄にもなく文藝春秋誌からグラビアに、と言われたので、撮影場所を聖三木図書館に指定した。撮影には館長だったデーケン神父さまが快く参加してくださり、



初夏に淡青色の花を開くネモフィラは、聖三木図書館友の会のシンボル・フラワー。花言葉は『ゆるし』。都心の花屋さんの店頭で、可憐に咲いていた。

私は司書の渋谷さんをも引つ張り込んで、三人の写真が掲載された。すると、デーケン神父さまの御友人がドイツでそれを見た、とすぐに電話があつた。その掲載誌が手元にならないから正確ではないが、「新芥川賞作家は聖三木図書館の返却期間破りの常習犯」というようなタイトルだった。もちろん、それは私の自己申告によるもので、心やさしい司書さんたちが「犯人」を告発したわけではない。

新しい建物に入つてすつかり明るくなった図書館は、日本のカトリックの未来を展望させるようだ。大学にとつても厳しい時代、一時は閉鎖も検討されたこの図書館の存続を求めて、請願人の末席に私も名を連ねたが、世話人の方々とりわけために連絡してくださつた小田切三千代さんに感謝である。

図書館でふと手にした一冊の本に将来を決められた、という人は多い。インターネットの時代になつても、時空を超えた世界像を、形而上界までも、示唆するのは「本」であることは変わらない。

断片である情報に刺激されて、さまざまな反応が心身に起き、深層で変動が生じていても、統一された言動として表現するには、格別のエネルギーが必要だ。若くても老いても、生の情動はすべての人の内奥にあるが、水泡のように浮かんで沈むそれを、掬い上げ、解放に導く流れを、示唆してくれる本は多い。

知的な面でも情的な面でも言えることだが、その双方の上にあるらしい「たましい」に関する示唆を、聖三木図書館の蔵書はたくさん蓄えている。カトリックの専門図書館といつても、カトリック教会とはよかれあしかれ世界の深部に巨大な力を及ぼしてきた大集団だから、その範囲は時空ともに非常に広い。と同時に、「地上を旅する」するものとして、現代のさなかに変革を続けている。人間の過去未来に思いを深め、自分がここに在る意味を知るために、うつつつけの図書館なのだ。

【木崎 さと子氏】一九三九年旧満州生まれ。東京女子短期大学卒業。結婚後フランス、米国に都合十余年在住。一九八〇年『裸足』で文学界新人賞、八四年に『青桐』で芥川賞を受賞。夫は、原田宏筑波大学名誉教授。二女がいる。

聖三木図書館から

【お知らせ】

◎夏期休館日は八月二十二日(月)～九月一日(木)です。  
◎計画停電が実施された場合、節電協力のため利用者の皆様にはご不便が生じる場合もございますが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会の新入会および会員継続更新をお願いいたします。皆さまから愛される図書館を目指します。

- ◎年会費 一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円
- ◎入会手続き 氏名・年齢・住所・学生証明書などの確認書類を図書館受付にご提示ください。
- ◎更新手続き 年会費の納入をお願いいたします。
- ◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。



JR・地下鉄 四ツ谷駅徒歩3分

JR 四ツ谷駅

地下鉄 四ツ谷駅

聖イグナチオ教会

2F 聖三木図書館

上智大学

イエズス会聖三木図書館  
〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1 岐部ホール内  
Tel. 03-3262-0364  
URL. [http://www.jesuits.or.jp/~j\\_seimikibun/](http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/)